

かないのだ」。

だが、この悲劇的な人間をすこしつき離して眺めるなら、それは同時に喜劇的でもあるだろう。ゴーリキーは自分の主人公をつよく愛しているが、しかし、リアリストの冷徹さを失っていない。それは、自己の人間性を安易に放棄して、体制の上にあぐらをかいて生きてきた人間が、最後の瞬間に、失われた人間性の回復にあわてふためく時、おちいらざるをえない悲喜劇的蟻地獄である。二月革命の嵐が迫ってくるにつれブルイチョフの体制批判はますます辛辣になるが、同時に、彼のなかの心情的専制論者、労働者にたいする「主人」的態度も強化され、しかも、この両者はたがいに目まぐるしく交替するのである。

ブルイチョフはバシキンに答えて、「労働者なんかには政権を渡せば、あつという間に国家を飲みつぶしてしまうぞ」と言っ

た口の下から、「だが待てよ。ひよっとしたら飲みつぶさないかも知れないな」と言い、また、「ラブチェフ（彼の名付け子、革命家）が自由の身で、皇帝が囚われの身とは……」と皮肉るかと思うと、次の瞬間には、「新しい皇帝をえらぶことだ。皇帝がいなくちゃ、お前さん方はたちまち喧嘩だ」と主張する。

ゴーリキーは各幕のフィナーレにおいて、この美しい、逞しい男が、すでにある意味においては、「囚人」、「狂人」、「死人」にすぎないことを強調しながら、彼のどうすることもできない、二面的な為の見方、考え方が、いかに残酷な滑稽さをもって、瞬時的に移行するかを描出することによって、主人公の悲劇と喜劇のおそろしいからみあいを究明しようとする。

（早稲田大学講師）

セバストーポリのトルストイ

藤 沼 貴

レフ・トルストイは1854年11月から55年11月までの1年間をクリミア戦争の中心地セバストーポリで過ごし、その間に『セバストーポリ三部作』を書いたほか、二、三の草稿や興味ぶかい日記、手紙などを残している。

この1年はトルストイ研究にとって重要な時期だが、その研究に一つの手がかりを与えるのは、三つのセバストーポリ短編の最初の作品『12月のセバストーポリ』（1855）である。

この作品の中には、異った二つの時期のトルストイの経験が、同時におこったことのように一つに結びつけられている。その一つは、1854年11月、セバストーポリ到着直後の鮮烈な経験であり、もう一つは、翌55年4月～5月の第4砲台（セバストーポリ最大の激戦地）での経験である。

この二つの経験はいずれも、従順だが本当の意味で勇敢なロシアの民衆兵士に対する感嘆と愛国心の高揚を中核としており、時間的にも3ヵ月のへだたりしかないので、

二つに分けられない、一続きの経験のように感じられ、それらが一つの作品に結合されているのは、むしろ当然のこゝのように感じられるかもしれない。

しかし、このような見方は粗雑であり、実際には、短い期間とはいえ、この1年は次のように4つの時期に区分しなければならない。

I. 1854年11月、セバストーポリ到着直後——11月20日付の兄セルゲイあての手紙などに見られるように、ロシア兵の偉大さへの感嘆と愛国心高揚の時期。

II. 54年11月末～55年3月末——『軍隊改革案』などに見られるように、ロシア兵士にきびしい批判の目を向け、愛国心にも動揺をきたした時期。

III. 55年3月末～4月末——第4砲台での経験を通じ、ふたたびIに似た気分が復活した時期。

IV. 55年5月～11月——上掲の二種の気分の総合の時期。

上記のように、『12月のセバストーポリ』に結合されている二つの経験の間には、『軍隊改革案』を頂点とする、ロシア兵士批判、愛国心減退の時期が横たわっている。そして、トルストイのセバストーポリ滞在の1年間は、ロシア兵士に対する感情と関心をめぐって、肯定——否定——肯定——総合の4時期に分けられるのである。

したがって、IIIの時期は表面的にIの時期に似ているにせよ、いったん否定をくぐり抜けたのちのものであり、質的に別の次元に達したものである。

× × ×

自己を発展させ、それを絶対的で全体的なものにまで拡大しようとする希望の実現が失敗したのち、トルストイは自己と外の

世界との関連、その弁証法をたしかめるために『幼年時代』を書き、創作活動の道に立った。この場合、重心は自己の側にあり、結局トルストイは、主人公自身の道徳的努力による自己と外の世界の再統一をえがきあげることを目ざしていたと考えられる。

カフカースに来てから、この重心の位置は変化し、自己中心から、絶対的・全体的なものへの傾斜がおこる。その原因の一つはルソーの著作に触発された思索であり、もう一つはカフカースの自然と民衆兵士の観察であった。

したがって、この時期の戦争小説『襲撃』『ロシア兵はどんな死に方をするか』では、「私」は自己の問題を問いつづけるながらも一歩後景にしりぞき、何か絶対的なものが暗示され、それに融合している民衆的人物が主人公としておし出される。

セバストーポリ到着直後（前掲表I）の時期はカフカース時代の継続であり、この時期に一般に言われているような「民衆の発見」はなく、その確認があるにすぎない。

新しい発見がおこなわれたのは、民衆兵士の否定面を見ずにいらなかったIIの時期であり、さらに、その否定面が民衆兵士に外から負わされたもので、本質的なものはやはりカフカース以来見てきた絶対的・全体的なものとの合一であることを発見したIIIの時期にはかならない。

このような否定——肯定——否定の過程をくぐり抜けたとき、トルストイにとって、民衆兵士は単に讃嘆の対象であることをやめ、否定面の一半の責任者であるかれ自身の内的経験の領域に入りこんでくる。セバストーポリにおけるトルストイの「民衆の発見」の真の意味はこのようなものであり、セバストーポリ滞在の1年の間には、重要でありながら見逃されがちな一つの分水嶺がひそんでいるのである。